

第3章

アーカイブとしての人間学研究所

—「鶴見和子文庫」にかかわる共同研究にみる—

人間学研究所に求められる貢献は、せんじ詰めて言えば「京都文教大学人間学研究所規程」に謳われた「(1) 学際的研究調査およびその成果の発表」「(3) 研究会および研修会の開催」「(5) 研究報告その他出版物の編集発行」であり、研究所はこれらの責務をこれまで十分果たしてきたことは既述のとおりである。

しかしながら、これらに加え、あまり注目されてこなかったが、きわめて重要なものとしてアーカイブ機能があることを指摘したい。これは規程でいえば「(8) 研究のために必要な資料の収集および整理」にあたるものであるが、もっと幅広く捉えるべきであろう。アーカイブ機能として当然ながら第一に指摘しなければならないのが、紀要『人間学研究』の発行である。紀要自体がアーカイブであるということだ。現在 20 年間に 16 号を発行しているが、その中には共同研究の成果であるシンポジウムや公開講演、共同研究から派生した個人の論文や研究ノート、さらには関連資料や活動の記録などが採録されている。とくに他の学部紀要が個人単位のバラバラな編集形態になりがちなのに対し、『人間学研究』は一定の目標に収斂するテーマのかたまりとして整理することが可能である。実際、著者が人間学研究所 20 年の研究活動の歴史を、「(分析)としてでなく「(叙述)として」こうして書くことができるのは、この紀要が残されているからである。

だが、アーカイブとしての人間学研究所という時、強調したいのは「(5)」とも「(8)」とも少し別のことである。大学において一般

にアーカイブ機能は図書館が第一義的には担うものと捉えられている。しかしながら、アーカイブはそれをアーカイブとして認識する者の存在によってはじめてその機能を発動するのである。制度化されたアーカイブ概念に引きずられて資料の保存整備という意味にそれを限定することは生産的でない。少し抽象的な言い方をすれば、アーカイブはそのアイデアを見出し、公共性の価値へと転換するプロセスを含めてアーカイブと見るべきであって、その意味で公共性の価値を発動させる場としての人間学研究所はアーカイブそのものといえるのだ。

この点をやや詳しく論じるために、「鶴見和子文庫」にまつわる共同研究の物語を紹介したい。京都文教大学図書館所蔵の「鶴見和子文庫」「鶴見文庫」は、鶴見和子氏により 1995、2006 年の 2 度にわたって寄贈されたもので、三分類されている。第一が鶴見和子氏の蔵書約 6000 冊（単行本、叢書、全集類）を図書館方式で分類整理し「鶴見和子文庫」として一箇所にまとめて開架したもの、第二が小冊子、雑誌、研究資料、カード、ノート類また AV 資料で未公開、第三が「鶴見文庫」と呼ばれ、鶴見祐輔蔵書のうち、トーマス・ウッドロウ・ウィルソン米国大統領の伝記を書く目的で収集された文献、時代考証資料、明治政治家の正伝類、また祐輔氏自著類から成っている。

2006 年この鶴見和子文庫というアーカイブを対象とした連続ミニ・シンポジウム「鶴見和子の仕事と鶴見和子文庫から思想と方法論の水脈をさぐる」が立ち上げられる。鶴見和子文庫に収められた書籍や資料の集積のされ方やそれらへの書き込みの分析から彼女の仕事や思想形成、さらには彼女が同時代の人々とのようにつながっていき、またそのネットワークの背後に控える時代状況とどう

かかわっていたのかを探究する試みである。西川祐子氏がこのような試みを思い立ったきっかけは、学生が赤線だらけの本をもってきたことだという。それが鶴見和子文庫の本だったことがわかり、鶴見本人が線を引き、書き込みをしたこと、そしてそこに彼女の思考の痕跡があることを諒解したのである。

だが、そのことがシンポジウム、共同研究へと結実するためには少なくとも2つの要素が揃わねばならない。一つは鶴見の蔵書がばらされることなく一カ所に収蔵されていること、つまり、アーカイブとして整備保存されることである。そしてもう一つは、当たり前ながらそのことの意味を察知する能力、すなわちアーカイブの価値を評価できる学知・学識といったものである。言い換えれば、アーカイブがそのアイデアを実現するためには、アーカイブをアーカイブとして読み取ろうとする主体の働きかけが必要である。

ここでもう少し考えなければならないのは、共同研究という有り様から見た場合、主体の働きかけが公共性に立脚しなければならないという点である。西川氏は、所長就任時に「研究所10年の研究活動の蓄積と学内のいわば文化資産を生かす企画をたてる」という方針を示している。鶴見和子文庫を念頭に置いていたことが窺えるが、そこには、鶴見和子文庫が研究所と関わりのある蓄積であり、何より学内の文化資産だという点において大方の了解を得られるだろうという想定がある。

実際、このシンポジウムには実に多くの参加者があった。そしてそれは共同研究プロジェクトへと発展していく（共同プロジェクト「個人の思想形成と蔵書の研究」研究会2007～09年度、科学研究費補助金（基盤研究（B）研究代表者・鶴飼正樹）『『普通の人の哲学』と『知識人の思想』の葛藤をめぐる戦後思想

史—鶴見和子文庫を開く』2008～2010年）。これらの共同研究プロジェクトの参加者の関心の有り様は、生活綴り方、E.エリクソン、南方熊楠、舞踊、デューイの「コモン・フェイス」、河合隼雄、河合栄治郎、1950年代、学習組織論と多様である。多様な関心をもつ主体が、区々の観点からであるが、軌を一にしてアーカイブとして認めるわけである。このような一連のプロセスを経て「赤線だらけの読みにくい本」は鶴見和子という興味深い人物の思索の多面性の痕跡として多くの人に読み込まれ、アーカイブの価値を再取得する。アーカイブは、人々にとっては価値を共有するプロセスであり、アーカイブという公共的価値が実現されるプロセスでもある。

西川氏はまた、「大学や図書館は当然のことながら、学生だけでなく教職員も来たりて去る場所である。開学と鶴見和子文庫第一次寄贈当時の記憶もまたしだいに薄れる。そこで本学人間学研究所は記憶の復活とあたらしい意味づけをめざして」この連続シンポジウムが始められたと言っている（『人間学研究』第7号）。西川氏が「記憶の復活」と言っているのは、99年4月に存命中の鶴見和子氏を迎えて行われた人間学研究所のシンポジウム「生命のリズム—倒れて後に思想を語る—『鶴見和子曼荼羅』刊行記念」（『人間学研究』第1号所収）を指しているのだろう。一連のシンポジウムをシンポジウム「生命のリズム」の「続き」としても企画したとはっきり記している（『人間学研究』第7号）。連続シンポジウムの第1回目に挨拶文を送った樋口和彦学長も、その中でやはりシンポジウム「生命のリズム」に触れている。

このように西川氏のなした仕事は、流動変化する集団の中で、そのままでは過去の遺物やがらくたに成り果ててしまうこともあるような危ういアーカイブを、研究所の過去の想

起という公共性の働きに置くことで、再創造させることであった。

アーカイブは確かに大切である。一つ一つの資料を丁寧に整備保管する作業がなければ何事も始まらない。だが、それは永久不変に価値をもつものではない。常に問い掛け、活性化するプロセスがなければ何の価値も生み出さない。逆に言えば、私たちのすでに潜在的にもっている内的価値を高めていくためには、このようなプロセスが働く場が必要なのである。少なくともこの場面においては、人間学研究所がそうした場として十全に機能していたことを知ることができるだろう。むしろ、この多様性は人間学研究所がもつ研究の「間口の広さ」によって支えられているという意味で、人間学研究所だからこそ実現できたということもできよう。鶴見文庫と人間学研究所のかかわりの歴史は、アーカイブとは一体何かということを伝える好事例であり、そのこと自体が広く知られるべきことである。

西川氏は2006年の連続シンポジウムの「長いタイトルには、わたしたちの試行錯誤、次世代へと言葉と思想をリレーする方法をさぐる手探り状態の表現と将来に託する希望をこめた」とも言っている。この発言はまさに人間学研究所という場の共同研究にふさわしい。定まらぬ未来を多様な試みによって切り開いていく創造的な歩みを見落とさないことが大学の長期的なビジョンとして必要ではないか。

結び 人間学研究所の将来とその課題 — 大学における研究の意義

学術研究機関の歴史を記述する作業においてぜひとも論じなければならない問題がある。それは現在の大学の教育機関化において研究のための機関は必要かという議論である。もちろん、20年史という本書の性格からいって、これを本格的に論ずることは余分であるとみることでもできよう。

しかしながら、回顧が必ずある視点をもち、展望へとつながることを想定するならば、やはりこの問題に触れないわけにはいかない。破格ではあるが、私見を祖述して公論が定まるのを俟ちたい。

大学が研究機関と教育機関に選別される中で、教育機関とされた大学において研究はいかなる意味をもつのだろうか。おそらく大学が専門領域を教育する高等教育機関ではなく、一般社会人教育（リベラルアーツ教育とは異なる）的なものへと移行する時点において研究と教育の一体性は必要性を喪失する。大学がこうした意味での「教育機関」を標榜する段階で教員の研究は二次的なものへと格下げされざるを得ない。教員の専門性と一般社会人教育の間に有意な関係を見出すことは難しいからである。こうなれば、教員の専門性は大学という残存的な位階を担保するために必要な制度上の要件にすぎず、本来の業務と関係の薄いものと見なすべきであろう。

「教育機関」であることを標榜し、さらにこうした事態が望むべきものでないと見定めるならば、いったい何を教育するのかということであらためて考える必要があるだろう。もちろん教員は各自の専門性から出発すべきである（一般人教育ならもっとすぐれた人材がいるはずである）。自分の専門性の中でいったい何が普遍性のある内実なのかを再度吟味し

て教育に活かしていくことが望まれるわけだ。

だが、専門分化がはなはだしい研究分野においてこの普遍性を自覚する機会はそう多くはない。応用分野においてはこれにあてはまらないと考えることもできるが、そうではあるまい。すぐさま応用できる「実学」が学生のニーズに合ったものであるかは場合によるし、それが普遍性につながるかということも検討を要する。

我田引水という批判を承知の上だが、専門性の中に普遍性を見出す契機を与えてくれるのが他分野の知見ではなかったか。共同研究という場ではなかったか。教育機関化を目指す中でこそ共同研究の有用性が再認識されるべきだと考える理由はここにあると考えるわけであるが、20年の歴史を振り返る中でこうした認識を深めたということを改めて述べておきたい。

人間学研究所がこれまでなしてきた研究や貢献はすでに述べたところである。ただ人間学研究所が果たしてきた役割は、こうした成果として明示できるようなものにとどまらない。共同研究という場はその後に開花し実りを得ることが求められるが、未成のまま終わるものがあったとしてもそこでなされたプロセスはそれ自体価値をもつ。こうした言辞は成果主義時代にふさわしくないかもしれない。ただこれは事実である。人間学研究所は、近年新たに設置された研究機関のいわば母体となっている。こうした役割を果たせるのはそれが「人間学」という「間口の広さ」をもったがゆえである。名称にこだわる必要はないが、ここで述べたような専門性を普遍性へと転換しうる共同研究を担保する間口の広さを保つことは今後も重要であると考えたい。

(了)

